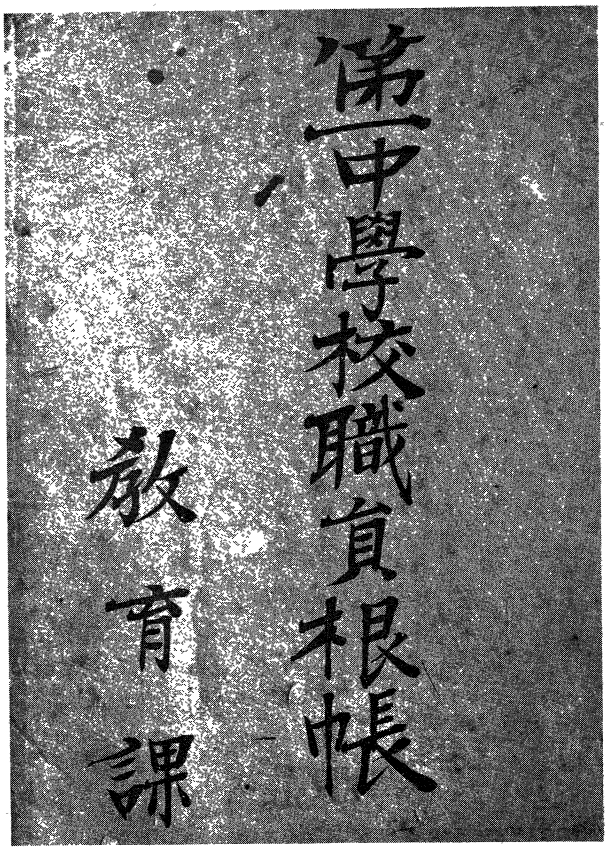
一泉

発行所
〒921 金沢市泉野出町
3丁目10－10
金沢泉丘高等学校内
一泉同窓会
電話(0762)42－0211
㈱橋本清文堂

懐かしき第一中学校資料

山森青硯（一中三十三回卒）



(1) 金沢第一中学校舎に吊してあった鐘

此の鐘は長らく本多町元金沢第一中学校旧校舎第一棟二階窓外に吊してあった鐘である。授業の始まり終りを告げる鐘。

幾多の卒業者は皆此の鐘の音を聞いて勉強したであろう。泉丘校には此の鐘を持帰り、第一棟、第二棟間の渡り廊下の軒下に吊してあった。写真（筆者と鐘）は昭和五十五年六月三十日畏友山岸徹夫氏撮影。

(2) 第一中学校職員根帳（教育課）

是は昭和四十年六月十日備中町能瀬古書店より購入したものである。畏友で左記の人があった。

沖野和雄氏（一中三十一回卒、大正十三年）故紙、故鉄商、金沢高岡町上藪内住、（北村魚泡洞氏と一中同期生であり、書誌学に通じ、古書店へ出入りし、古品を売却していた人。）

沖野氏が終戦時、県庁内焼却書類を入手して古書店に入れていた。本冊も沖野氏が能瀬店に入れたものである。扨「第一中学校職員根帳」は石川県教育課に一点しかなき、天下の孤本である。

是れと一緒に在ったと覚しきものに第四高等学校の入学者の入学時の誓書があった。此れには藤岡作太郎等一人一人が校則を守る誓約を自筆

して居る。同じく能瀬店に蔵していた卒論（井上靖）等も在った。一中根帳に所載してある経歴と、現時教育者（同人）の経歴書と甚しく異るものもある。所載先師達の御名を左記してみよう。

久田　督、上山小三郎、岡上　梁、原桂太郎、藤井準夫、細江逸記、渡辺盛次郎、宮本治作、高田徳佐、佐々木三六、宮地政倫、大石藤太郎、松田髯一、安田松太郎、越村仁吉、辻　甫、安田太作、野島乙松、橋船次郎、日置　謙、小原清吉、富田弥作、岩崎法賢、末七太郎、山本定三、鏑木勢岐、松本時吉、西崎　武、平田恭雄、木村清松、大中兼吉、遠田運雄、杉山外世四郎、内田雄太郎、吉村源之助、吉野勝太郎、中村賢美、三谷仙太郎、都城　馨、長谷勝利、三浦茂雄、松尾三郎、金子徳三郎、荒見多三、水辺鎮次、松原外松

筆者本冊に依り、先師日置謙氏の生地確めることが出来た。

明治三十一年九月卅日師範学校尋常中学校高等女学校英語科、師範学校女子部高等科史科教員免許（文部省）

（住所）石川県金沢市岩根町一五七

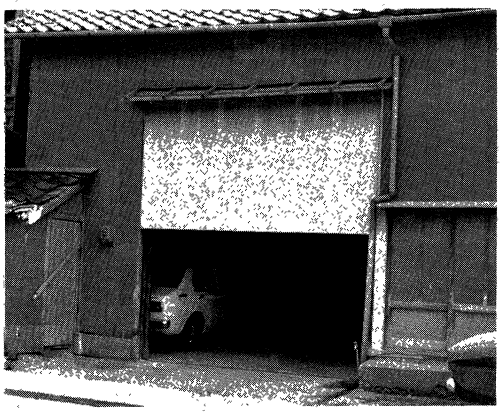
（氏名）石川県士族　日置謙　明治六年三月生

とあった。

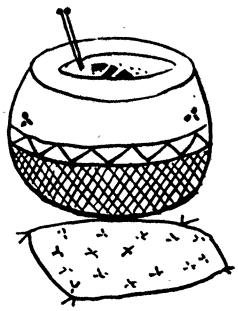
(3) 第一中学校雨天体操場

なつかしい西側雨天体操場である。此処に靴修理のオッサンがいつも来て居た。此の建物を三等分して、其の一つを、尾張町一丁目九―四五（下今町）「菓子食品問屋ＫＫ宝屋本社資生堂商品センター」として移築してあったが、不日火災にて消失した。又三分の一は、筆者拙宅隣り（長町三丁目十三）金沢炭屋組合が在り、其処に移築してあった。（根上登氏所有）。昭和五十三年五月、同所分割割地して分売された。

惜しい哉、昭和五十三年五月二十七日早々此の家屋敷取こわされた。写真は壊す前日筆者撮影したものである。大低の学校控所と云うものは合掌になっているが、一中西控所に限り、中に柱が数本立っていた。（金沢一中泉丘高校七十年史四九六頁、五四二頁写真参照）移築の時、天井だけ取除いてあり、此処を自動車置場としてあった。



（懐かしき石川県立金沢第一中学校最後の建物である）



唯我独存

谷　恵吉郎（一中二十回卒）

母校、金沢一中を卒業して七十六年の月日を重ね、今や同期生は遂に自分一人となった。正に唯我独尊ならぬ唯我独存の境地である。

私共は明治四十一年、本多の森に爛漫と咲き誇る桜を仰ぎ見て入学したが、入学試験に応募したもの三百三十六名、合格者百七十八名であった。五年間の在学中、幾多の離合集散あり、大正二年同時卒業したのは百三十六名であった。多数の恩師と級友の面影を想い浮べ、往時を偲び、無量の感慨に耽るのである。

五十人以上にも昇ると思う、一中時代の恩師はその多数に愛称ともいうべき渾名があったが、それ等の方々総てが今はとうの昔に物故された。しかしその令息や親族の方々と親交を結んでいる向も相当数ある。博物のセンマ橋船五郎先生の令息知来氏、英語のアンマ越村仁吉先生の令息衛一氏などはその例である。また豪傑校長の名で通った久田督校長の没後、その後任として時の李家隆介石川県知事により前任地の静岡県の掛川中学校長から簡抜されて赴任された、ナマズ小松倍一校長の甥、秀雄氏の一家とは特別の交際を続けている。

多数の恩師の思い出を追う中で、特に鮮烈に脳裡に残っているのはトリヤ安田太作先生との出会いの一場面である。

先生は明治十年の西南の役に軍曹の階級で従軍した経歴の持主として伝えられ、それを証明するかのように、立派な髭が黒光りする顔面に厳然と蓄えられ、古武士の風格堂々たるものがあった。私が三年生の時すなわち明治四十三年のことである。運動場でトリヤ先生指揮の下に体操の訓練中、私の動作が緩慢であるというので、隊列から二三歩列外に立たせられ、強く叱責されたのである。『勉強（座学的）がいくら出来ても、からだが弱くては何にもならぬ。体操もしっかりやらないと駄目だ』というのである。同級生の注目する面前で、徹底的劣等感を味わされた私は恥ずかしさと口惜しさで唯々、顔を真赤にするばかりであった。そしてその時トリヤ先生が引用されたのは藤岡作太郎先生の名であった。我が郷土が明治三年に生んだ文科系碩学として三太郎先生の名が高い。すなわち藤岡作太郎（東圃）、西田幾太郎、鈴木貞太郎（大拙）の三先生である。

我が一中の創立より六年前の明治二十年、開設された四高を金沢に誘

致する為には石川県民一致して懸命の努力が払われた。その四高の前身ともいうべきものに石川県立専門学校というものが既存していた。その学校に前記三太郎先生は同級生として在学していて、同時にトリヤ先生も体操教師として就職していたのである。

三太郎先生の中の西田幾多郎先生は東京帝国大学哲学科選科を卒業し、四高教授を経て、京都帝大に於て世界的哲学者として西田哲学の名を天下に轟かされたが、昭和二十年、業未だ半ばの思を残し遂に他界された。没後その業蹟と経歴とはＮＨＫのラジオで度々放送された。その中で先生の逸話として、次のようなことが伝えられている。それによると、石川県立専門学校在学中の藤岡作太郎生徒は生来、蒲柳の質であり、トリヤ先生の厳格な体操訓練に苦労していたその有様を見て、西田幾多郎生徒は体操教師に議論を吹きかけ、到頭訓練を中止させたというのである。藤岡生徒は四高、帝大と進学し、国文学を専攻し、その業蹟は学界に於て高く評価されていたが、京都帝国大学助教授在任中明治四十三年、四十才の若さを以て遂に病没されたのである。この報道を知ったトリヤ先生は往時を回顧し、今昔の感に堪えず、標的を私に定め、欝積した感慨をぶっ放したという訳である。ことに程左様に幼少時の私は栄養不良、体格劣弱であった。然るにその私が多数の剛健強壮な同級生よりも長寿を保ち今日あるは一に大自然の格別の恩恵と加護とによるものと感謝せずにはおられない。同時に前記のトリヤ先生の強烈な叱責も慈愛の籠った有難い説諭であったと思うようになった。

親善訪英旅行記

伊藤直之（一中三十九回卒）

此度英国参戦者協会から要請がありビルマ英霊顕彰会主催、全ビルマ戦友団体連絡会議協賛の訪英団が派遣されることになりました。

この度の大喪の礼に際しましては英国内で反日的な記事が書かれたとの報道もあり何かと不安もありましたが、この計画を実施する事により英国内の一部反日的な空気を少しでも改善することになればと思って出発いたしました。

私の部隊にとっては昭和十七年五月二十二日アキャブ飛行場に来襲したブレンハイム爆撃機で多大なる犠牲を受けるも帰還生存せし日本陸軍戦闘機隊の元64Ｆ軍医小林龍男氏（現千葉医大名誉教授）が二ヶ年前より宿敵マーチン・ハガード氏と文通され、共に肝胆相照す仲となり、是が非でも参加し対面握手すべく亦興味深々逸る心を押え六月七日十二名（一中44期の吉野秀一郎氏も同行）と共に英旅客機に搭乗成田を離陸出発しました。

機はシベリヤ横断直行便日本海をアッと思う間に過ぎ、初めて見るシベリヤ大陸広漠たる原野を眼下に見ながら飛行約13時間ロンドン、ヒースロー空港着訪英の第一歩を踏みスカイホテルに宿泊。明くれば六月八日専用バスにて通訳厚井女史（石川県山中町出身）同乗し一路高速道を南下しウイルソン准将（コヒマ戦従軍）に招待される「ランバーハースト」ぶどう園に到着居並ぶ英戦友会のお迎えを受けガレッヂにて会食懇談、微笑常にたたえる准将歓迎の辞を述べらる、吾等にとっては初めて会うハガード夫妻、ジャジサン氏との対面で心臓の高鳴りを覚えつつ、「今日はほんとにお会い出来て嬉しい」と早速準備した贈り物を差し上げ両氏と奥様に固い握手を交わし奇遇を喜び合い英語は語られずとも態度動作により血の交う温い手を感じ興奮「来て良かった」と痛感した。自家製ワインを飲みながら互に挨拶

詩三題

北川申三（一中四十四回卒）

金石角力大会

響本多森健児歌
期必勝稽古応援
金石土俵濤声近
旗幟林立蛮声高

懐旧師

波瀾重畳幾星霜
恩愛敬慕比山海
桜章門下養浩然
深垂頭先師之恩

論時事

経済大国冠世界
農業鎖国将来孤
今不開放不共栄
百年親善虧一簣

し自己紹介となる。小生はインパールでスピット戦闘機の攻撃を受け受傷、安田君はアキァブ来襲ブレンハイム機の一弾を受け受傷生還したと述べ本日両氏にお会い出来た事を大変嬉しいと所感を述べた。会場は和い雰囲気に包まれ談笑高潮する頃終了。ぶどう園を廻りウイルソン准将邸宅に案内され若き頃の准将の写真、先祖伝来の記念品骨董並ぶ部屋にてテーパーテのご馳走になり見事なる芝生の花壇を一巡し英戦友に見送られ亦ハガード氏とは六月十七日再会を約し手を振りながら別れ一路ロンドンに帰った。

六月九日国内機により「エジンバラ」に向い出発。雲下に見るは緑一色の牧草地飛ぶこと一時間空港着、専用バスでスターリング城に着き古城を一巡崩れ落ちた教会跡、城壁コヒマ慰霊碑、古城の歴史の説明を聞きウイルソン准将が準備されたホテルに行き英戦友会と懇談「コヒマ」激戦地にて入手された日本軍兵士の遺品日の丸の国旗の返還が行われ団長牛山氏恭しく受領された。熱き涙と共に胸迫り悲しい思出が湧き出て来た。見れば武運長久…堺市熊野尋常小学校六年参組一同と墨書されあり先生の出征に贈られたものならん、**嗚呼!!**終ってエジンバラ大学に行き日本語科イアン・ガウ教授とレセプション。通訳は同大教授夫人岡崎女史（広島）であったが此処丈けは日本語が通じ学生とも語り合う事が出来た。

六月十日観光地エジンバラ古城見学観光の多いのに驚く。独得スコットランド衛兵の交代を見ると共に何かの記念日だったのか砲列の号砲響く中、城内を廻る昔は要塞の地であったのであろう。城内の慰霊堂には第一次欧州大戦以来の戦病没者名簿と共に軍旗が飾られており黙禱を捧げられる姿を見て吾国の靖国神社に対する政府国民の冷淡さを実感し辞去した。車は南下し「ヨーク」に向い走り途中「アームストロング」卿の壮大なる別荘に到着し華麗な豪邸内を見学、特に昭和天皇並びに現天皇も訪問された写真が飾られてあり、親日家である。日露戦で三笠、八島の軍艦を造って貰った恩人で特別に日本室が設けられてあり陛下よりの贈物浮世絵が飾られてあった。今更卿の偉大さに敬服した。

六月十一日「ヨーク」市教会裏の「コヒマ」記念碑に到り一同粛然として黙禱を捧げた（「コヒマ」とはインパールの北の要塞で押し寄せる戦車と対峙日本軍死守激戦地であった）終って第二師団司令部を訪問ルイスアーレン氏（東南アジア司令部語学情報将校）の案内で幹部の出迎えを受け第一次訪英団より贈られた武者鎧飾られた前で交歓アーレン氏の流暢なる日本語の挨拶「英国は日露戦には日本を支援し日英同盟をした仲、不幸にして第二次大戦に戦火を交え甚だ残念」との発言あり吾等の胸を衝き沈黙せざるを得なかった。アーレン氏は当時情報将校として教育を受け日本の歴史と共に日本語を習得され「シッタン」河渡河計画を入手し効を奏したとのこと、英語を敵性語として排した吾国と比較させられ「敵を知り己れを知らば百戦危しからず」の兵法の言葉が脳裏をかすめた。昼食はホテルで留守隊長戦友会と会食懇談スコーレン氏（弾着観測機パイロット）と同じ拵縦者として俄然話が合い歓談した。

キャストン氏はマレイで捕虜となり泰緬鉄道建設に酷使され「日本兵ならまだしも某国現地人に殴打され死んだ者もいる」の言、誠に赤面戦争の傷痕の深さと生涯忘れられざる反日感情の消滅には至難なる業と感ぜざるを得なかった。これよりグラスミヤに着き泊まる。

六月十二日「レキウム」に行き英戦友会と会食亦ＢＢＣ放送のインタビューを受け「ウエルズ」を一巡し宿泊、六月十三日「オックスフォード」に向う途中「シェクスピア」生誕地宅を見学オクスフォードカレッジで教授の案内で図書館を一巡（蔵書六百万）「ブレンフェイン」宮殿見学壮麗広大さに圧倒される。

六月十四日「ノーザプトン」着トーン准将手配により博物館見学リーチ大佐（コヒマ砲兵隊）宅訪問広大なる芝生の中の先祖伝来由緒ある豪邸にて「コヒマ」戦を聞きコーヒパーテを終え緑の牧野の中の高速道をロンドンに直行宿泊。

六月十五日ロンドン市セントパウロス大聖堂ロンドンタワー上下院議会館を眺め鉄の女宰相サッチャー女史の顔を眼に浮ばせ「バッキンガム」宮殿前に行き壮麗厳粛なる衛兵交代パレードを見る。将に人形の兵隊シヨーである華麗さ厳粛さに圧倒された。昼食は前述のアーレン氏を囲み歓談「私の日本語はもう錆びました」その冗句に驚いた。頭の冴えた愉快

なる人である。後帝国戦争博物館見学吾等航空人にとっては戦車や大砲各種飛行機特にその中にある日本海軍零戦の胴体座席脚部が釘づけにされ、唯々悲運なる姿を眼前に見て残念無念であった。亦特別な計らいで戦時中のビルマの記録映画を見せて貰った約一時間息を殺して見守ると共にインパール攻撃後方攪乱ウインゲート准将率いる空挺部隊の情景、戦車部隊の進撃特に日本軍兵士の死体清掃の場面は何とも重苦しく見るに忍びなかった。夕刻は英戦友の好意に依り衛兵隊広場の予約席に行き壮大厳粛な近衛陸海空軍軍楽隊五百名有余のパレード、吹奏楽のリズムを聞き隊形歩調整然規律も正しく繰りひろがれ唯々讃嘆圧倒され最後に五万の観衆起立し英国々歌吹奏合唱された光景は老大英帝国まだまだ愛国心、忠誠心、旺盛にして力強さを実感した。

六月十六日夕刻はタクシーにより英戦友会が準備された「パブ」で交歓シーマン氏他十四名戦友英側の挨拶、乾杯となり昔日を談笑しながら杯を重ね高潮となる。英側も遙々田舎より出席し久し振りの歓談らしく盛り上った会となり質問も飛び出し「何故インパールを攻撃して来たか」「日本の捕虜虐待に依る反日的将兵の未だ居る」ことの説明があった。私達にとっては辛辣に聞える質問であり厳粛に受けとめざるを得ない。雰囲気は和やかに進められ親善の目的を達し解散する。

六月十七日安田、伊藤には待望のハガード氏ジャジサン氏との再会の日となり、ハガード氏態々ホテルまで迎えに来て呉れ臨時通訳藤縄女史と共に列車に乗り三十分オーピング駅下車ジャジサン氏の車にてビイギング・ヒル飛行場の予約席テントに案内され「航空ショー」を見物することになった。先着のブロック・ウエートウェット氏夫妻と合流し夫人手製の心からなるサンドウィッチをパクつきながらワインを飲み昼食アルコールの廻りと共に戦隊歌の一節を歌い英訳したがさっぱり通じない様でしたが歓談しきり。ジェット機爆音耳を突き垂直離陸ジェット機の編隊飛行、アクロバットを見ながら若かりし頃を偲ぶ情湧き出て腕の鳴る思いであった。聞けばこの飛行場は戦時中ドイツ爆撃の出発基地であった由住民もこの烈しい爆音にも拘らず充分理解し吾国と比べ大差を感じた。帰宿時間も迫りジャジサン氏氏の車にて送られホテル着。「来年も亦来い良い計画を建て待っているぞ」との温い言葉を受け別れを惜しみつつ固い握手をして別れた。嗚呼亦何時の日会える事だろうか、空の男の友情心に泌むると共に「昨日の敵は今日の友」会って見れば皆普通の人間血の交う握手の温もりを感じ互に国を護る一念で若き情熱を燃やし戦火を交える結果となったのである。恨むこと誰れも無し目的を果し機上の人となり再び成田に戻りホッとした次第であります。

短い旅行ではあったが自然に恵まれたすばらしい緑の国、牧草丘陵地に見るは緬羊ばかり製産工場も無く資源に乏しく総て輸入、七ッの海を支配した国とは思われず老英大帝国と感を深くしたが礼儀正しく謙譲美徳の紳士国、内外の色々な問題を抱えながらもご英霊を護り忠誠心深く皇室を尚び歴史伝統を良く守り愛国心強く正義感と共に世界のリーダーシップを把み先進国として永く栄光の座を占めることでしょう。翻えって我国の現情は戦に敗れつつも経済大国迄に成長したが過去を総て悪として放擲しご英霊の尊い血を忘れ否定するが如き国民多く一寸歯車が狂えば如何なる事になるかも知れない現状。国の将来を危惧せざるを得ない。

一泉俳句

金丸直治（一中四十六回卒）

落日の眩しく透る冬木立
「第九」の耳に残れる冬の月
文焼きて記憶は白く年の果
行燈を小さく置いてなづな打つ
七種を叩き千切りし粥もらう
冬茜村の鎮守の群れ鴉
春日射し友禅流しの小紋浮く
起上り小法師の頬や日の障子
ずわい蟹泡吹いてゐる大市場
紅梅や観音坂の六地蔵
芽木の風砂丘の真中貫ける
トンネルを二つ越す間を春の霧
春雨や苔庭青さ滲み出せる
いく曲り入江の奥に梅の村
紅梅をそびらに石造五重塔

新・新 ちょっといい話

南　秀男（一中四十一回卒）

文芸春秋連載の戸板康二の「ちょっといい話〃流に昔の一中時代の思い出を二、三綴ります。

●藤井準夫先生は漢文の先生

藤井ガンマ先生に一年生のとき、漢文を習った。

「宮崎キンポ幼にして学を……」

「なに、どこにチンポと書いてある。立てっとろ。次。」

みんな思わず噴き出した。

「誰れじゃ、今そこでガチャガチャ笑ったモンは。痰壺のところで立てっとろ。次。」

「宮崎キンポ幼にして……」

「まだ分らんのか。チンポ、いやキンポだ。次。」

かくして一組五十人のうち、三十人が次次と立たされた。エンマ帖を手に眼鏡ごしにジロリ見のガンマ先生は怖かった。

ある日先生が

「無花果の白い汁を尻につけると飛び上がる程しみるが、痔の特効薬でナ。儂や痔で困っとるんや。誰れか無花果を持ってきてくれんか。」

神様のように思えたガンマ先生も普通の人だった。

●角脇義明先生は英語の先生

朝礼の後、週番生徒の引率で教室に入るのだが、天気のいい日になると〃遠足や！遠足や！〃と喚いてみんなゾロゾロ裏門から運動場に出てグランドに座り込む。顔を真っ赤にしたカミナリ先生（角脇先生）が怒りに来る。悪童連は一斉にグランドに落ちている棒切れを拾ってきて突き立てて

「雷が来たぞォ!!」

避雷針にカミナリ先生は逃げて行った。

●瀬戸宗右衛門先生は柔道の先生

上の運動場のところに養浩堂があった。いつの頃からか剣道場が下の講堂に移転して、あとは柔道専用となった。この道場に入る時は入口のところで正面の白いカーテンに向って深々と敬礼をしなければならなかった。

何ごとのおわしますかは知らねども…である。宗右衛門先生は時々稽古をつけてくれるが、大方はいつも火鉢で股あぶり。

白いカーテンの奥には、ご真影でもあるのだろうと頭を下げていたが、ある日先生不在の時そっと中を覗いて見て驚いた。宗右衛門先生の洗濯した褌がヒラヒラ乾してあるではないか。そうか、しめ縄に最敬礼していたのだったか。

●太田耕作のコイナ先生

例の校長排斥のストライキの時の首謀者の一人、浅野竜麿（チョロ）は豪傑だった。寺町の魚屋の倅だったので彼の冬の弁当のおかずはきまってモミジコ。彼は三時間目にはもう昼飯を食べてしまって、モミジコの一切れをポイと火鉢の中に放り込む。教室はモウモウと煙るし、パチパチ魚の匂いで一杯。

そこへ四時間目の代数の太田渋柿先生が入ってくる。モミジコの悪戯に先生は渋柿のような顔を一層歪めて

「こいなことをしては困る。」

と苦りきった様子。

先生は岡山県出身だった。以後先生の別の渾名がコイナ先生。

●順教寺先生は教練の先生

順教寺辰二先生は兵隊さん上がりの七聯隊出身の少尉さん。凡そ知性に欠けていて悪童連に馬鹿にされながら、それでも親しまれていた。

昭和七年の上海事変に応召となり、翌年目出度く凱旋されたが、ある日講堂に全校生徒を集めて、上海戦の戦史を講演されたことがある。

「その時（夜襲の時）戦場は昼尚暗しの戦況の中……。」

とやり、聞いていた生徒一同えェ！は平気で、得意満面。

●中村岩次郎のガンタ先生

中村先生は順教寺先生と同様七聯隊から天下りの謹厳実直型の中尉さんだった。

伊藤トッカピン校長好みのガンタ先生は着任早々生徒と同じ詰め襟の制服（平井洋服店で作った両袖に緑筋入り）を着て、先輩諸賢が書き残された教室の中塗り壁のところの落書きを柄のついたブラシで掻き落とすのが仕事だった。その時のガンタ先生の心境が歌で残されている。

変わり行く人の心は果てしなし
　変わらぬものは一中魂
（愚満）

●事　件

昭和六年四月、尾山神社の祭礼の晩、一中生刺殺されると言うショッキングな事件があった。

被害者は同期生（当時三年生）の阿部昌業君であった。西町の甚右衛門坂のところの憲兵隊屯所の前の道路上が現場である。犯人の金沢中学の永田某と喧嘩になり、短刀で一突きの即死である。クラブ間の反目と女性問題が原因だった。

その時、一緒に居たのが前田繁敬（オト）府玻浩（チョンコ）粟生慶実（アオ）田中喜良（キリョ）の諸君だったが、彼等もその晩、玉川署の豚箱に入れられ、臭いメシを食わ

される羽目になった。

その時、田中キリョの叔父さんが時の金沢市議会議長（三十六代）坂野権次郎さんであり、片や玉川署の署長が同じく同期生村木俊雄（ダイブツ）のお父さんだった関係で、翌朝直ぐ全員貰い受けられて出署してきた。

いつの世もコネが幸いすることらしい。

（つづく）

「利家遺言状」に学ぶ

高科伸一（一中四十四回卒）

日本史において中世から近世への飛躍発展を演出したのは、織田信長、豊臣秀吉並びに徳川家康であって、疑いもなくこの三人が主役であろう。

前田利家は、信長の旗本であった若年の頃から次第にこの三人と深い係わりを持ち、のちに加越能百万石の太守として秀吉の全国統一に大きく寄与するところがあったし、晩年には豊臣家の安危と前田家の存亡とをかけて家康を相手に虚々実々の駈け引きを展開した人物である。いわば、この時代におけるトップクラスの武将であったと認められる。

利家は、慶長四年三月死に臨んで嗣子利長にあてた十箇条からなる遺言状を残した。当時は秀吉の死後半年あまり後で家康の勢威がとみに伸長したため、諸大名の向背に動揺がみられ、天下は混沌とした情勢下にあった。すなわち、関ヶ原合戦の前年にあたる。

この「利家遺言状」を読むと、彼が私利私欲を捨て去り、澄み切った心境でこれを綴ったことが窺われる。古語に、「死は易し、死に処するは最も難し」とあるが、利家の心事と対処は、まことに見事なもので、深い感動の念を禁じ得なかった。以下にその要点を紹介し、ささやかな考察を加えることとしたい。

遺訓の第一条は、風雲急な政情にかんがみ、加賀藩の戦備を厳にすべきことを命じたものであるが、遺言状の性格を決定づける重要な意義をもっている。

「亜相公（大納言利家）御夜話」によると、「家康と我らは敵々に必なり申すべく候」とあり、彼がいずれ東西の手切れ必至と見ていたことは明らかで、一旦緩急の暁には在国の次子利政の人数を上坂させ、利長の手勢と合した総兵力をあげて事に当るべしと指示している。その他、金沢城の守将の指名やその人物力量についても言及するなど周倒を極めたものである。

しかし、ここで注目したいのは、予想される戦争目的として、「自然上方（大坂）に申分出来、秀頼様（秀吉の遺孤）に対し謀反仕る者候はば云々」と明記していることである。

この表現は、まことに大胆不敵と言わねばならない。というのは、彼の死後東西のバランスが大きく崩れることは容易に予想されたし、また、彼の家臣に家康のスパイがおり、遺言状の内容など直ちに通報されると承知の上であったのである。したがって、ここで大坂方の旗幟を明らかにすることは、将来の前田家の危機を自ら招く結果になりかねないとみられるからである。

いわゆる豊臣恩顧の諸大名が、秀頼側近との不和を理由に続々家康への傾斜を深めていく中で、利家のとったこの態度は、秀吉の遺託に応えようとする義心の発露でもあり、また、真の大勇を示すものとして、一服の清涼剤にも似た清清しさを覚えさせる。

徳永栄中将は、その著「孫子の真実」の序の中で、「絶対の道とか人間の誠とか人間意識の外にある何ものかが現実の行為に現われるとき、それが真実なのであり、人間の精神機能が根本的に転換して悟性が生活の表面に浮び出るとき、つまり、我執迷妄のない心になれば、自然に真実が判るのである。」と説いておられる。

遺言状のこの条項には利家の誠が滲み出ていることから、彼の思慮は上述したような境地において生み出され、必然的に真実に適うものとなったのであろうと私は考える。

芳春夫人小伝によると、利家は、臨終に際して最後まで秀頼の身を案じ続けたといい、のちにこれを聞いた家康も、彼の志を感じて落涙を禁じ得なかったと伝えられる。利家の誠実さを物語る佳話というべきであろう。

遺訓の第五条は、短文ではあるが、第一条との関連においてきわめて重要な意味をもつと思われる。

すなわち、利長は三年間は加州（金沢）へ下ってはならない（大坂城で秀頼を守護せよ）と厳命したものであるが、これに続いて「其内何とか埒明き申すべく候事」と記載されている。

「埒明き」とは、東西の対立状態も近いうちに解消するであろうとの意味であろうが、どういう結末を想定しているかについてはふれておらず、現在これを知る手掛かりは何も残っていないようである。（私見）

いずれにせよ、利家は、当時政権

の中枢にあって天下の動静に関する豊富な情報を得ていたと思われ、十分熟慮したうえで情勢判断を行ったであろうから、これは彼の大局観を示すものとして注目に値すると考えられる。（彼の予言は的中し、関ヶ原合戦を経て三年後には一応の東西平和が成立した。）

利家ほどの人物であるから、近い将来の豊臣家の運命を見とおしていたであろうし、また、若冠利長の手で大坂城の起死回生を実現できるとも考えていなかったであろう。したがって、豊家に殉ずるかあるいはこれを見限るかという指示が不可能であったとは思われない。しかし、情勢は常に有為転変であり、戦うことが必ずしも至善至高とは限らないのである。

利家が、この時点において決定的な対応を強制せず、むしろこの条項に埒明き云々という微妙な表現を用いることによって、次代の利長らにその判断を任せたことは、時宜を得た見事な決断とみるべきであろう。

あるいはこれを、人事を尽くして天命を待つという彼の達観と受けとめるべきかもしれない。

徳永中将は、孫子の戦争観に論及した部分で、「孫子は、戦争を不祥の器としながらも、人間が不完全であるかぎり絶滅は至難であると視る。しかし、戦争は人命資材を損耗する悲惨なものであるから、国の存立上真にやむを得ない場合の他は戦うべきではない。すなわち、戦争の開始に当たっては、和戦の決定はきわめて慎重でなければならないとするのである。」と述べておられる。（「孫子の真実」第一部前の解説）

利家の遺訓を受けた利長は、母芳春院の同意を得て家康との和平策を採り、結局避戦に成功したのであるが、彼等の方策が「真実」に適うものか否かについては、より深遠な考証を必要とするであろう。しかし、あるいは上述の孫子の考え方に近いものではなかったかと思われるのである。

これと対照的な例として、われわれは太平洋戦争開戦前の状況を想起せざるを得ない。軍部特に陸軍の一部指導層は、独善的、かつ、狂信的理念をふりかざして、国民を泥沼のような無謀な戦争に追いこんだのである。これらの経緯については、高木惣吉少将や阿川弘之氏等の著作に詳しいのでここでは省略するが、要するにこれに対する反省を今後の思想と行動に生かすことこそ重要なのである。

孫子の戦争観は、現代にも十分通ずると確信されるのであるが、形篇に「善く兵を用うる者は、道を修めて法を保つ。故に、能く勝敗の政を為す。」とあるのは、特に軍事にたづさわる者にとって不滅の金言であると思う。

遺訓の第六条は、合戦に際しての武将の心構えを諭したものである。

すなわち、信長の戦は常に領国外で戦われたことを例に引き、合戦にあたっては、敵の畔際でもよいから必らず踏み込んで戦うべし、さらに、領国への敵の侵入は、たとえ草蔭であっても絶対許すべからずと厳しい調子で教えている。

この考え方は、一見時代離れしたように思われるかもしれないが決してそうではあるまい。例えば、次のような逸話が想い出される。

太平洋戦争開戦時の山本連合艦隊長官が、嶋田海相にあてた書信の中に、「（前略）幸に南方作戦比較的有利に発展しつつありとも、万一敵機東京、大阪を急襲し、一朝にして此両都府を焼きつくせるが如き場合は勿論、さ程の損害なしとするも、国論（衆愚の）は果して海軍に対して何というべきか、日露戦争を回想すれば想半ばに過ぐるものありと存じ候。（後略）」という一節がある。（高木惣吉著「山本五十六と米内光政」）

これに対して、「近代戦を戦っているのだから、本土空襲などは常識

一泉短歌

北嶋友子（通信十二回卒）

君好むオクラの花の可憐さよ
道を歩きて知る夏の朝

台風の去りたる後の稲の穂に
手を差しのべし人の後姿

六人の家族睦みし日は遠く
今年も白きくちなしの花

むらさきの杜若咲く雨のなか
株わけくれし人想いおり

仕事終え夕日に燃ゆる田や畑を
車窓から見る君の住む村

人の目にふれることなく散りし花
山深くさす朝日に光る

ではないか。」という意見もあったといいうし、開戦時の軍令部作戦課長であった富岡定俊少将も、「なぜ山本長官が、あれほど本土空襲を怖れるのか、理解に苦しむほどだった。」と戦後に述懐したという。

しかし、山本長官の作戦指導上の配慮は、終始一貫変わらなかったと伝えられている。われわれとしては、海上にあって国防最高の任にあった人がこうした心構えでおられたことに対し、国民としても後輩としても忘れるべきではないと考える。

遺訓の第八条は、文武両道を重視するよう教えたものであり、また、第九条及び第十条は、主だった家臣について、その人物・識量・戦功等を詳述し、今後の待遇や心配り等に関する指示を与えたものである。

その他の条項も含め、総じて綿密周到を極めたものであるが、ここでは割愛することとしたい。

これまで「利家遺言状」の主要項目を紹介し、私見を補足してきたのであるが、以下利家の死生観と大局観について若干ふれておきたいと思う。

利家は、青壮の頃から槍一筋の武名の高かった人物で、生涯三十度に余る合戦を戦っているが、そのうち前田家の浮沈に係わるものが少くとも三度あったとみることができる。

すなわち、信長の死によって独立を脅かされた能登石動山の戦、秀吉と対峙せざるを得なかった近江柳ヶ瀬の戦、並びに佐々成政の侵攻を受けて起った能登末森山の戦がこれで、いずれも利家にとって絶体絶命の危機といえるものであった。

彼の遺言状の精神的基盤を形成したと思われる透徹した死生観は、これらの合戦を通じて培われ、危機を克服することによって確立されたものであろう。そこには、「秀吉遺言状」のような女々しさは微塵も感ぜられず、冷静沈着に死と対面した覚悟のほどが窺われる。このことは、時代を超えた最高の教訓ではないかと考えられるのである。

次に、先にも書いたように、彼の優れた情勢判断力に基づく大局観には全く感服の他はないと思う。おそらくこれは、中年以後秀吉や家康らとの交遊を通じて会得すると同時に、自ら反省開眼した学問の力によって自得したものであろう。利家は、こうした道程を経て、一介の武辺から戦術家へ、さらに政・戦略家へと大きく成長したと考えられる。

遺言状に見られる彼の大局観は、その修業過程を通じて得られた戦争哲学や政治哲学の精華として、最後に集約されたものと思われるのである。

大局観にからんで再び太平洋戦争の例を引くと、大本営の中佐参謀であった吉田俊雄は、自著の中で、「太平洋戦争の敗因の最大のものは、情勢判断を誤ったことである。」また、「海軍は、昭和の時代になっても作戦研究だけしていればよく、戦争研究はしないでもよいと考えたのは、エリート中のエリート達であった。」と書いている。

さらに、前出の富岡少将も、戦後の反省として、「いま一番痛感しているのは、太平洋戦争を顧みて、日本軍には『作戦研究』はあったが、『戦争研究』はなかったということである。私たちは、軍人は政治に関与すべからずというシツケをいやというほどたたきこまれてきたが、これはしまったと今でも痛感する次第である。」と述べている。

利家の遺訓に現われた彼の思想と行動を調べて、その情勢判断と大局観に思い致ったとき、上述した所見を想起したのであった。これらに対しては、賛否両論があるかもしれない。しかし、上に述べられた所見は、深刻な反省に基づくものであり、現在の国防問題においても看過し得ない重大な要素を含むと判断され、特に軍事関係者において真剣な考察を必要とするのではないかと考えられる。

五箇山のくれない燃ゆる
　ふるし木を
水面に見つつ峡下りゆく

リンゴ畑案内くれし人の名を
　知らず来し道風花が舞う

火の色の落葉拾いて病み臥せる
　父に見せたく夜の道行く

わが好む口紅色にダリヤ咲く
　今朝は霧雨にけぶる庭に

除雪する朝を初めて会う顔と
　微笑み交わす新雪の中

炬燵出しつつ我は思へり夫の住む
　越後の村の夜の寒さを

最後に、「利家遺言状」を読了して、その根本的精神について考えてみると、彼の狙いというか眼目とするところは、呉子のいう「治国平天下」にあるように感ぜられる。換言すると、孫子の教える「兵は国の大事なり。死生の地、存亡の道、察せざるべからざるなり。」の実践ということであろうか。

ところで、政治といい、戦争といい、本来は国家の独立繁栄や国民の平和と安全を目的とすべきものであろう。しかるに、歴史の教えるところによれば、これを見失った実例のいかに数限りなくあることか。

おそらくこれは、人間の心のなせる業であろうし、それだけに人間の心の研究（哲学）は、一層重視されるべきであると考えられる。

「利家遺言状」について、わたくしは当時における軍事哲学の白眉とみるのであるが、現代の国防問題に対しても、先人の訓として時代を超えた意義をもつと思うのである。

『キンカン・ナマナマ』

太田定夫（一中四十六回卒）

「オーイ、キンカンナマナマになったゾ。遊ぼうや」学校帰りの悪童連。「タダイマ」と家に帰るなり鞄は玄関の敷台にポーン。早速「竹ボックリ」か「竹スキー」に「コシキダ」持って「遊びに行ッテキマス」とスタコラサッサ。あまりの早さに「勉強は、宿題は」と言う暇もない母親は台所でポカン。昔も今も悪童連は遊ぶことにはしかかった。

所は野町二丁目からくだる昔の上小柳町。今通れば何の変哲もない坂道だが、昭和の初期には上三分の二が急で、下三分の一はなだらかな、まことに良いスロープの坂だった。夜どおし降り続く雪の日が数日続き、積雪が固まってその上をゴムタイヤの荷車や橇が通ると道はつるつるに滑るようになる。このような状態を「キンカン・ナマナマ」と言った。金柑の実のつるつるした表面の感じからとった言葉と思うが、殊に凍ってツルツルになった時は「ナマナマ」に力を入れて言えばそれで雪の状況が友に通じたものである。なんとなく雰囲気のわかる金沢式方言ではなかったろうか。

また「竹ポックリ」は「竹ポッポ」とも言い竹を半分にパカンと割ったものに鼻緒をつけた下駄式簡易スケート。「竹スキー」は名の通り竹製小型スキーで、先を曲げるのに炭火をカッカおこして竹の表裏の膨脹、収縮をうまく利用し作りあげた。これらは竹細工店や下駄屋の店頭に並べて売ってもいたが、この時分の小学生は学校の工作時間にこのような竹細工品を製作させられたものだ。

「コシキダ」は木製除雪用具。特に子供用のものは滑る時の杖のかわりになるし、雪合戦の道具にもなった。

上小柳町の坂は周囲の町から集った悪童たちでワアワア、キャーキャー。坂の上から「ドケ・ドケ・ドケ」とわめいて滑りおりてくる奴がおる。尻もちついて尻制動。バッタリ倒れて顔面制動。「コシキダ」に新雪をつけ、これを飛ばして滑りおりる友に雪礫を見舞う奴。いやはや賑かな子供天国であった。

荷車や橇を引いて坂を登るオッサンは滑って登れたものではない。そこはよくしたもので悪童たちまち変じてオタスケマン。よくそれらの後押しをして「アンヤト・アンヤト」とオッサンに言われ一日一善を果した良い気持。昭和初期のこの時代は自動車などという代物は大通りでも見るのが一時間に十台以内。雪の日にはこんな小路に入りこんでくる自動車はまったく無く、町の買物主要道路であったこの坂も子供の天下。通行の大人は遠慮しながら坂の片隅を歩いたものであった。

ところで、ここの横町の袋小路に独りイジワルジイサンが住んでござった。このジイサン、キンカンナマナマの頭に頭巾をチョコンとかぶり子供がワイワイさわぐといつも「かん」の虫がたつ性格。子供の遊びが最高潮に達した頃「十能」に灰を山盛りに盛ってヒョコヒョコ出てきてこれをやられると天然スロープももうオシマイ。子供天国もとたんに地獄となって小さい声で「エイ、クソジジイ」悪童連ショボショボ御帰宅の段となる。

子供の頃はたしかに自分の住んでいる町が「ボク達ワタシ達の領分」であった。野町の国道と平行した私の住んでいた石坂与力町は、この坂の付近で松任へ行く電車線路の踏切りにより領分が二つにわかれていた。ところが踏切りの向うに超スーパー大餓鬼大将一人ありその名を「西本正」という。彼と私は小学校男子師範付属で同級同組。一中も同クラス。とにかく口では言い尽せぬ大変なヤンチャ坊主。ある日のこと彼がかのイジワルジイサンに武者振りついて

ひっくり返し、頭から灰神楽かぶって本人目も口もあかず。ジイサン腰打って起上れず、坂の付近は大騒ぎとなったことがある。そのほか春ともなれば踏切付近の市電レールに癇しゃく玉を並べるわ、小石を並べるわで坂を降りてくる電車は急停車。電車の運転手サンも事故処理の監督サンも「又ヤッタカ。西本の坊メガ」と西本宅へ怒鳴りこむが、その時分は御大いち早く遠くの町か田圃へ緊急避難して捕ったことなし。いたずらは度外れ、はしかさは天下一品の大将であった。現代っ子にくらべ遊びもはるかにやんちゃで野性味あふれ世間様もそれを認める当時の環境なればこそ悪ガキ連中大手をふって冬の町にノサバッていたものだ。

さて今のような融雪装置も機械力もなかった昭和初期の裏町は一晩雪が降り積ればもう道の両側は雪の山。屋根雪おろしをいっせいに始めると屋根までとどく雪の壁。昭和二年の大雪にはこの上小柳町の坂も両側の家屋、店舗の屋根雪おろしで雪道の高さがついに二階の大屋根と同一レベルとなり、途中の八百屋は十二段の雪の階段を掘り下げて出入口にしていた。階段の上には「↙コノ下ニ八百屋アリ」の木看板が立てられる始末。当時六、七才だった私はこの看板で八百屋という漢字をおぼえたものだった。

あの頃から半世紀以上の歳月が流れ去った。先日も同年配のオバサン連中にキンカン・ナマナマと言ったら「貴方ナンと言う懐しい言葉を言うまさる」と目を細うしてほめられた。これでお互のトシが判るというもの。しかしながら、あの頃の子供の世界の野放図な楽しさは今もまたわが胸に熱い思いをよみがえらせ、私を遠い昔の世界に置いてくれるのである。

○西本正…「昭十九・九・十五　支那広西省信都県白塞にて戦死。陸軍少佐」（戦死公報より）

〃流水に　光るものある　落葉かな〃

我が戦記（その一）
―青春の回想―

中嶋悦郎（一中四十八回卒）

〔兵学校志望の動機〕

江田島を志して認めた一文がある。題して「述志」。仲なか勇ましい。当時の中学生の胸を張った建前論であろう。

茫漠タル草莽ニ一子アリ、蓬丈高クシテ彼ヲ草中ニ埋ム。一子草中ニ匍伏シテ一蟲螻ト戯ル。彼眼有リ、何ゾ広漠タル草原ヲ見ズヤ、何ゾ無窮ナル虚空ヲ望マザルヤ。天ノ声スナリ、一子即チ奮起ス。我東海ノ君子国ニ生ヲ享ケタリ。普天の下、卒土の浜、広大無辺ノ君恩ヲ恭ウシ、日夜安泰ニシテ生ヲ楽ム、我等臣民如何デ聖恩ニ感泣セザランヤ天寵ヲ蒙リ何ゾ忘恩ノ徒タラントスルヤ。皇国臣民ノ一挙手一投足即チ尽忠報国ノ至誠ナラザル可カラズ。我若少ニシテ世の機微ニ通暁セズ、然レドモ皇国臣民ノ最タルヲ武人ニ見ル。身ヲ鴻羽毛ノ軽キニ処シ義ヲ大嶽ノ重キニ観ジ猛然ト大義ニ生クル武人ノ精神ヲ見ル。世ニ士農工商之有リ、一トシテ欠ク能ワズ各々嚮ウ処天下国家ノ為ナラザル者無キ為リ。農者曰ク五穀富穣以テ国家ニ報ゼント、工者曰ク生産以テ国家ヲ富マシメント、商者亦曰ク富国以テ国家ヲ利セント、斯ク観ジ来レバ我何人ニ身ヲ投ジテモ可也。然レドモ茲ニ懐ウ、我男子ナリ、勇者タリ、真ノ生命ニ生クル者、之武人タリト。農工商ヲ嫌ウニ非ズ、士ヲ好ム也。武トハ何ゾ、武ハ力ナリ、威力ナリ、邦家ノ進展、力無クシテ何ゾ能ウ可ケンヤ。熟々惟ルニ国家ノ盛衰ハ即チ武力ノ盛衰ニ一致ス。古来武ニ依リテ国興リ隆盛トナリ、亦武ニ依リテ衰滅ス、埃及然リ希臘亦然リ、更ニ其ノ最モ卑近ナル例証ヲ支那ニ見ル、支那ニ於ケル諸国家ハ武ヲ以テ他ヲ滅ボシ、後武ヲ蔑ニシテ自ラ没シヌ。武力ハ平時ニ於テモ軽ンズベキモノニ非ズ、況ヤ国家非常ノ時ニ於テヲヤ。想ウニ日本ハ海国也。海国ノ武備ハ先ズ海軍ヨリ始ム、茲ニ於テ我、海軍軍人タラント欲ス。古人曰ク海ヲ制スル者能ク世界ヲ制スト。コハ我ガ海洋国日本ニ於テ最モ適切ナル名言ナリ。海洋ヲ自然的障壁ト頼ミシ時代ハ一世紀ノ昔ナリ。今ニシテ些々タル一島国ニ踞蹲踽踏シテ偸安ノ夢ヲ貪ランカ、一朝外夷侵寇シテ亡国ノ悲哀火ヲ視ルヨリ明カナリ。然ウシテ我等民族ノ発展ハ斯カル旧態ヲ脱スル事能ワザル状況ニ到達シツツアリ。茲ニ海軍無カラザル可カラズ。帝国発展ノ先陣ニ立ッテ驀進スルハ実ニ海軍ナリ。然リシコウシテ世界平和ヲ確保スルコソ帝国海軍ノ使命ニ非ズシテソモ何ゾヤ。今ヤ世界ノ大勢ヲ観ズルニ曽テ飽ク無キ貪婪ノ眼ヲ光ラシ南ニ北ニ東ニ西ニ、弱小諸国

ヲ併呑シ左手ニ所謂文明ノ利器ヲ持チ右手ニ邪悪ナル武力ヲ以テ欺瞞ト恐喝ノ搾取的植民政策ヲ国是ト為シ来リシ英国有リ。然ウシテ今ヤ盟邦独逸ニ依テ打撃ヲ受ケツツアリト謂エドモ、其ノ海軍力亦軽ンズ可キニ非ズ。更ニ眼ヲ太平洋ノ彼方ニ転ゼンカ、遙カ五千浬ノ大陸ニ平和ヲロニシツツモ限リ無キ富力ヲ悪用シ彼ノモンロー主義ナルモノヲ帝国主義ニ化ケシメタル好戦人種ノ魔手、西ニ伸ビツツアリ。此ノ秋ニ当タリ東亜ニ毅然タル大日本帝国アリテ世界秩序再建設ニ邁進シツツアリ。帝国海軍ノ前途、多難ニシテ又、洋々タリ。戦火濛々トシテ、一天四海ヲ覆イ、砲声殷々トシテ天地ニ、轟ク、鳴呼、我戦陣ノ子タリ。何ゾ小成ニ安ンゼンヤ、我男子ナリ。渺々タル大洋ニ、唯己アルノミ、唯身ヲ水漬ク屍ト誓イシ己アルノミ。此処ニ男子の本懐非ズシテ、ソモ何処ニカ求メンヤ。鳴呼、我、海ト供ニ生クル青雲ノ海洋児ナリ。願クハ天地ノ神仏、我ガ大成ヲ照覧シ給へ。

皇紀二千六百一年十月

十九歳　中嶋悦郎　記

入ってから解った事であるが、こんなに右翼的で硬直してはいない。海軍（ネービー）はもっとスマートであった。建前論はともかく、本音はどうであったろうか？

短ジャケットに伊達造りの短剣、純白の第二種軍装で夏休暇になると必ず講堂に現われ檄を飛ばした先輩の姿。卒業すれば世界一周の遠洋航海！カッコイイナー。ともかく自分は身体壮健、大学へ進学しても、何れ兵役が待っている。泥くさい陸式教練は苦手。海軍へ行こう！海軍士官になろう！十五年夏の入試のあと海軍人事部、釣谷中佐から補欠三番に入っているとの内報で、密かに期待していたが合格の報来らず。若し此の時入っていたら戦死率二分の一の七十二期の事、恐らく太平洋の藻屑は間違いないところだろう。

金沢一中は進学校で、優秀な連中は四年修了で四高へどんどん入って行くので、小生の学業成績もトコロテン式に上昇し百五十二人中九番で卒業し、夏の兵学校試験も二十一倍の難関をなんとか突破した。合格発表、十一月三日、遂に少年時代から憧れていた江田島海軍兵学校へ入校した。昭和十六年十二月一日の事である。

パリ・ローマへの旅

斎藤弥吉
（一中四十九回卒）

(一)

昭和も押し迫った六十三年暮、一中同期の前川明範氏より、パリからのハガキを受けとった。普通便なので、本人帰国されてから大分経ってから届いたものでした。毎年一度は仕事柄、フランスへ行っているのですが、珍らしくパリの香りのする絵葉書だったので、それ迄迷っていた私も、パリ行きを決意しました。

さて私は北国新聞に曽て勤務していた友人に、自作の掛軸を披露したのが縁となり、「裏打と表装」なる講座開設とともに、会員となった。北国文化センターが企画主催した「フランス革命二百周年記念ベルサイユ祭文化交流使節団」の一員として、参加することにしました。

(二)

北国文化センターは、講師・会員・職員・記者を含め七十八名の使節団を編成し、初参加した「第九回日本伝統文化ベルサイユ祭」は、平成元年二月十八・十九の二日間に亘り開催され、作品の披露や実演を通じて、華やかな民間外交を展開し、大きな成果を挙げたものと思われます。

フランスは、パリ郊外、ベルサイユ市にある、ベルサイユ宮殿の前広場に面して建っているパレ・デ・コングレ劇場の会場には、日本より送られた書・水墨画・日本画・表装・てまり・袋物・花デザイン・人形・篆刻・各流生け花が展示され、市長、駐仏木内日本大使をはじめ、約五千人の市民が訪れて賑わいました。

二階大劇場に於ては、表千家、裏千家による、はじめての試みである舞台での点茶実演、又バックミュージック入りの優雅な着物着付、それに日本民謡や踊り等を展開し、会場を埋め尽した大観衆を充分満足させたと思われます。

更に、一階円形大広間に繰り広げられた、会場の模様に触れますと、先ず玄関広間に日本酒四斗樽の鏡を割ったものを二樽並べ、法被、鉢巻の係りが、来訪者にこれを振る舞い、大広間入口に、金沢市の紋章、獅子頭、大きな獅子蚊帳、パネル写真などを配し、中へ入れば、会場を埋めつくすように出品展示物を飾り、中にはフランス側の友情出品の日本盆栽、きめ込み人形なども程よく飾られてありました。

会場の一角では、表・裏両千家交替の日本茶道の接待があり、お菓子好きのフランス人が、引きもきらず押しよせ、持参の茶菓子が底をつき、

一枚の煎餅を四つに割り急場をしのいでおりました。又私の出品したコーナーは、毛筆による書・水墨画・篆刻などの実演を行ったので、此処も立錐の余地も無い程の見学者にあふれ、水墨画実演に色紙を描いたものですから、希望者が殺到、遂に先生ダウンのハプニングもありました。又篆刻実演では、手を休める都度、見学者の名前を書き込み、持参の印を押すサービスを行ったので、持参の用紙はたちまちなくなるといった盛況でした。

オリエント文化に対するフランス市民の熱いまなざしを感じた次第です。

(三)

パリやベルサイユは、思ったより治安は良好でした。ベルサイユ祭の期間中、ジプシーを郊外に追放したせいかも知れません。又何よりも、旅行期間は記録的な暖冬で、寒さ知らずの快適な旅でした。完全な冬装束で参加した私は汗だくでした。

二月のパリは冬のバカンスの季節でした。郊外へ出る自動車で大渋滞でした。しかし通り過ぎる車の中に日本車は見当りませんでした。EC諸国では日本車を見るのは無理らしいですね。

道路は市内に入れば石だたみ、五階以上の建物はない。それもすべて石造り。とにかく一戸建住宅は禁止とか、大統領以下借家住いというお国柄です。日本人のように家計簿の中に、ローン支払の項目は考えられない。レストランではミネラル水もワインも同じ値でした。市民にはいまだに厳として階級があると聞きました。パリ市内には看板も電柱も見当りません。何世紀にもわたり石で造られた街は、よく保存され、そこに人が住んでいるせいか、あたたかい感じすら受けました。

十二フランを支払い、ベルサイユ宮殿をくまなく廻り、ルイ王朝の栄華をまのあたりに見ました。又シャンティ城も見ましたが、さすが近代洋画の先進地、随分多くの油彩画を見ることが出来ました。

(四)

さてローマへまいりましたが、これ又記録的に雨が降らず、今年の夏は水不足で大変なことになると心配していました。ともかくローマの市街地は、ローマ帝国の遺跡をそのまま現代に引きずり、遺跡の上で市民生活が営まれております。例えば建物の修理をしようとして、壁をとりこわしたりすれば、たちまち昔の柱や礎石にぶつかります。遺跡保存優先の街ですから、工事を中断しなければなりません。街で見かける作業現場は、遺跡の発掘、又はその補修。それから建造物の外装を五年とか六年かけて復元補修している場所のみです。郊外では新しいアパートの建築をしているのをみましたが。

七つの丘からなるローマ市内は、至る所広場とオベリスク、そして水飲み場が見られ、どの道も次のオベリスクと広場迄まっすぐ通じています。四、五人で地図を片手に、半日程ウインドショッピングを楽しみました。市内散歩での注意事項は只一つ、暗くなったら公園に入るな、でした。

散歩の途中道路工事現場に出くわしましたが、長い昼休みの最中で人影もなく、その修理現場を見て驚きました。日本なら石だたみの修理なら下に砂を敷きつめ、新しいレンガ状のものを並べかえる程度と思っていましたが、ここでは一辺約十糎角の長さ五十乃至六十糎程の石柱です。これをすき間なく立て並べてゆくのです。市内のどの道もこのようにして出来ているのです。

この石の街に住む人達の会話「私のアパートは古くて困っているのだって、百八十年も経つのよ」「まあそんなに新しいの、私のとこなんか二百五十年も経つのよ」このように居住空間は、その広さに於て数百年、何にも変っていない。恐らく家具も代々使っていたものを使っていると思います。此処でも家のローン支払に悩む市民はなさそうです。ローマには車検の制度はありませんから、車はこわれる迄、親から子、兄弟、友人とたらい廻しに使われ、庶民は車庫を持ちませんから、どの道も車で一杯です。

ラテン系のイタリア人は昼〇時から四時迄必ず家へ帰り、ワインを飲みスパゲッティを食べ昼寝をして午後四時に又出勤します。イタリア人は職住近接の生活をしております。私達もようやく四時から街角でショッピングを楽しむことができました。

イタリア人の生き甲斐は、働かず楽をし、ワインを飲み、スパゲッティを大喰いし、カンツォーネを歌い、すてきな女の傍にいることです。

イタリアが統一国家になったのは、近々六十年前、ムッソリーニの時代です。街のレストランで日本では有名なナポリ民謡を所望した処、知らないと云われました。地方の民謡は全くといって知らないらしい。

ローマからナポリへと、太陽街道を走りました。長靴の上は荒涼たる風景です。アッピア街道を横切りナポリに入り、ポンペイの遺跡を見学しました。二千年前の売春宿が二ヶ所も原型通り発掘されておりました。

ナポリのレストランで中食をとりましたがサラダは野菜のブツ切り、

フルーツに出されたみかんはかごに大小不揃いの山盛りです。そして味はすっぱく、日本のスーパーの山と積まれた商品を好き勝手に選ぶことと思わず比較しました。

又ローマへ帰りました。ローマでの宿は、パルコ・デ・プリンシペでした。此処へ来て、引率責任者であるセンター理事長加藤夏樹氏は一中五十五回生であることを知り、私の部屋で一夜歓を尽しました。

(五)

旅を通じてのある一面の印象ですが、円の偉大な力を体験することができました。パリやローマの市民が、石造りの住いに住み、やれバカンス、やれワインにと費している間に、私達は無一物の中から、木と紙で作った「うさぎ小屋」に住み、家や土地のローン支払に、汗水たらして働いた日本人の方が、今経済力を豊かにし、戦後四十数年たち、昭和が終り、平成を迎え、斎藤弥吉が自前の木と紙の一戸建に住み、4WDのマイカーを運転し、九日間の外遊を楽しむようになりました。軍人であった時代には考えも及ばない現実です。

私は今から十数年前、一ドル三六〇円の時代、絵画展出品の為台湾を訪れたことがあります。このときも円は強いのにびっくりしたことがありましたが、今回は一ドル一三〇円です。私達が立ち寄ったカナダ、オランダ、フランス、イタリーどの土産品店の店先でも日本の札がそのまま使えました。

酒類など余りに安く、帰国したら洋酒だけは禁酒しようと思った位です。若し開発途上国を旅したなら、それこそ戦後アメリカ人が日本へ来て王侯貴族のような生活をしていたのを見ておりましたが、その通りのことが再現できるのではと、けしからぬ事を思ったりしました。

さて帰国の途中昭和天皇の御大葬に出くわし、旅程の変更などありましたが、無事帰り「ああ日本はええ国だ」「金沢もなんちゅうええ所だ」と思いました。

古里の友人たち

小原　明
（一中四十九回卒）

(一) 山川家での同期の友茶会

卒業後四十五年がたった。同期会も何と二十年ぶりに昨年（昭和六十三年）三月三日東京は丸の内で行われた。名付けて関東近県在住金沢一中第四十九期会、総員数四十名の内三十名が集った。山田君とは卒業以来であった。お互の家が近いせいもあり、その後は時々藤沢で一杯やり彼の家に寄るのがお決りのコースとなった。山田夫人はお茶の先生、談たまたま山川家での茶会の話となった。今年は是非一緒にということになり二月十一日ついに実現した。

「もてなしの冬のはじめの蕗の苔」まず当日の客人の一人南君（秋草子）の句が玄関正面に飾ってあった。十二月に入って一度霰にあうと蕗の葉は枯れるが、その中心には既に指先大位の固いふきのとうができている。採集して一度油でいため甘露煮にする。山川家発明の一品とか、昨年の茶会で南君が賞味し句にしたもの。そのとなりにやはり当日の客人斎藤弥吉君の油絵「鷹の巣岩」（富来町巌門）。つづいて通された書斎にはやはり客人石田（直行）君の油絵「輝黄葉の頃」（森本、福光間県境近く東原あたりの銀杏の大樹）がかけられてあった。まさしく当日の客を迎える亭主の心遣いが感じられる。

やがて奥の広間で濃茶の席が始まる。遠路初参加ということで私が正客になる。お茶の心得のあるのは山川夫人と山田夫人のお二人のみ、要所要所をご教示願う。ひとしきり終って石田君「私は医者の立場で思うのですが、廻し飲みは病気等に対して如何なものでしょうか」それに対し山川夫人「病気がある人は自らお茶席に上るのを遠慮するという心遣いも茶道のうちではないかと思います。」答えて妙というべきか。正面に扁額あり。書はもちろん書家山川君、表装が何と斎藤弥吉君、見事な出来栄え。談たまたま釣の話にうつる。山女釣の好きな山川君は、最近魚がとみに減少した事に気付き毎年九月になると養魚場で山女の稚魚を八百匹ばかり購入し黙って川に放ち四月の解禁を待つとか、斎藤君が話す。山川氏笑って話の外にいる。副茶碗に井戸茶碗あり銘なし。山川君が私に銘をつけてほしいという。これまた正客に対する礼かと思うが、しばらくして桜美では如何かとこたえる。

桜美とは金沢一中・泉丘高校の美術の同窓会を云う。画の宮沢先生を中心にした集りで、毎年十月大和ホールで展覧会が開催される。当日の石田・南・斎藤・山川君らすべてその桜美会の役員である。茶碗は全員の賛同を得桜美と銘名された。

(二) 雅遊の道プロデューサー斎藤君

群なせる鮎の遡上も近からん
人居ぬ渓にただ一人釣る

と山川君が詠んだように、六月十七日彼は鮎釣りに集中していた。手紙には十六日鮎解禁日は朝から降雨のため中止、十時集合（宮沢先生、斎藤・千田・山川ら四氏）陶器の上絵書（呉須）をするとある。同じこと

が斎藤君の手紙にもあり、自分が準備した素焼にそれぞれ絵付をし二十一日焼上った。

水指し、鉢、中皿、香合など一人四点ばかり、良く出来たら七月十三日からの小品展（北陸電力サービスセンター）に出す予定とある。

斎藤君の日常は、毎日朝夕は畑に精を出し、あいだの時間は優雅の道にいそしむというか、この四月から六月にかけて大伴家持の高岡周辺の歌碑を調べ写真に撮っている。十月には同好の士をつれて歌碑めぐりをする準備のためとある。

また、小生には雅遊人―細野燕台の生涯―里文出版の著者北室正枝氏（金沢在住の篆刻家）が中国の「書票」いわゆる蔵書票の実例を調査しておられるので手伝ってあげてほしいとのこと、現代の雅遊人斎藤弥吉君の依頼とあらば、わからぬ道ながら調べてみなければと思っている。

私も既に六十有余年、その内いまの仕事からはなれる日もあるだろう。その時は年に何回か金沢に帰って、斎藤プロデューサーのレールに乗って雅遊の道を探索してみたいと思う。

終わりになったが、金沢は有名なお茶どころ、お茶会の話に茶会記がないのも片手落かと思い、山川夫人にお願いした。ここにその一部をご紹介させていただく。

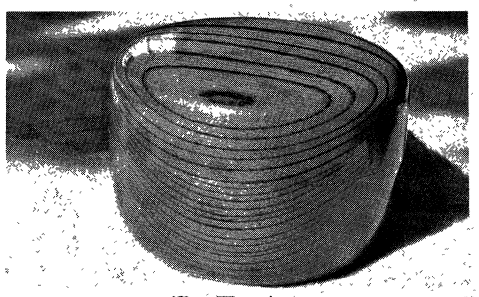
茶会記　平成元年（己巳）
二月十一日

本席
床　春屋宗園の書　慶長十年（乙巳）
花　山ざくら（きんきまめざくら）二十数年前大乗寺山にて山どり　西王母（椿）
花入　竹二重　宗旦作
香合　おしどり　仁清作
釜　丸釜青海波地紋　寒雉作
茶入　古瀬戸　戸衾
茶杓　瀬田掃部作
薄器　中棗　青貝椿蒔絵
　　鉄五郎作
茶碗
濃茶　黒楽　大樋長左衛門（長）
　　桜美会員
　　井戸　（銘・桜美）
薄茶　伊羅保
　　飴楽　初代大樋長左衛門作
（以下省略）

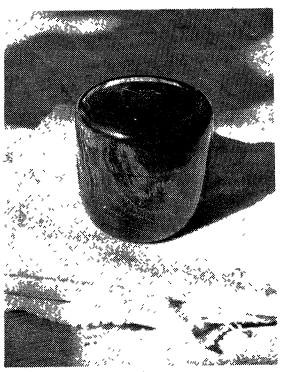
（注）山川家は昭和三十三年建設準備中の石川県美術館へ現在の国宝、野々村仁清作色絵雉香炉を含む三点を寄贈。次に昭和五十八年、現在の石川県立美術館が新しく開設されたことと山川美術財団設立二十周年を記念して、財団の所蔵品百三十一点全作品が寄附された。毎年一月恒例の「山川コレクション茶道美術名品展」として公開される。

同窓の作品

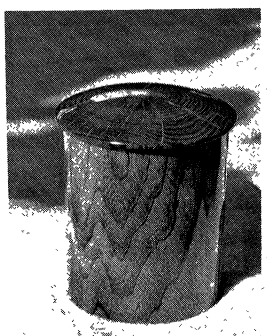
山中町　梶原外良行
（通信十三回卒）



欅平棗
（拭漆仕上げ）



蔦　棗（拭漆仕上げ）



蔦金輪寺（拭漆仕上げ）

或る一日

川上延江
（通信二十七回卒）

最近父の姿勢が前屈みになりだしたのを、八十一という年齢を考えれば無理も無いことと思っていた。それでも先日御供会の一時間余りの法話の間、シャンと背筋を伸ばしたままだったのには明治の気概を見る思いがした。

しかし元々多弁な人では無かったのが、近頃は自分から話しかけることはしなくなった。一緒に住む弟達夫婦が何かと話しかけ気遣ってくれているのが嬉しい。

でも、そんな父が寂しくもあり気にもなる。気がついたら今まで案じてもらった自分達と立場が逆になっていた。

今日は休みだし、好物の刺身でもご馳走しようかと出掛けようとしていたら、近くに住む妹から、里帰りをした姪と嫁ぎ先の上宝村名物「とち密」を持って寄ると電話があった。それじゃ一緒に実家で集まることにしようということになり車を走らせた。

父は「おう来たがか、そうか有難う」とひとこと。以前ならお前達も一杯呑むかとすすめたり、チビチビ始めることさえあったのに、ただニコニコと妹達と私が話すのを聞いている。「聞いてばっかし居ないで、何か話してよ、ほんとに昔の勢いどうしたんやろ」という私に「めんどくさいだけや」とポツリ。その顔が何とも穏やかで、先頃テレビで見た円空仏を思い出してしまった。

姪がこの前ほんの庭先に子猿が現れて、かわいい仕草で何やら食べていた話を、相変らずおっとりとした口振で話すのを父は目を細くして、「ホウホウ」と聞いている。

ついで今年は十三回忌になる母の話となり「お母さんの書いたメモでもないのかねえ、私の若い頃の日記も置いたままやと思うんやけど」と私「お父さん、私達の名前のことだけど、Nちゃんのは姓名判断に行って名付けたそうで、その時に残った方を私に付けたってほんとう？」と妹「おうそうや、サルハシシンゴという占師が付けたんや」と父、これには驚いた。初めて耳にする名前だったし、それと私達の誕生日は忘れてしまっているらしいのにと笑ってしまった。

珍しがり屋の陽気な妹が「やっぱりそうか、私はひとの残りの名前を貰った拾いっ子か、やっぱり橋の下やったんかとまぜっかえすと、父は声をあげて笑った。

こんなもんならあるが、と父の出してきた見覚えのある母のバックを二人で引張り合って見ていたら、昭和十年代に数年横須賀に暮した頃の小さな家計簿があった。癖のある母の筆跡が懐かしい。家賃四十円というのが見つかり「あの頃の四十円だと商売も景気が良かったんかね？」と尋ねると「そうやったかな、あの頃はただ夢中やったから」と父も感慨深げである。昭和十五年三月三日という欄にNちゃんのお口初め（メモのまま）白酒一円二十銭とあった。一瞬私は胸が一杯になり口がきけなかった。私が丁度百日目を少し越えた日であり、ご馳走も少しはあったのか買物もその日は多いように思えた。父母の誕生日を祝ったこともない親不幸を思って涙が出た。

妹が気を利かせて「じゃこの中に私達のことも出てくるかも知れないし、お母さんを皆で想い出すのに、法要の日までに少しずつ書き直してみるわ」と立上がり、お互いに夕食の時間を控えての訪問だったので帰ることにした。送って出た父の満足そうな顔がとても嬉しかった。

思いがけない母とのめぐり逢いでもあった。

（昭和十二年板橋の平均的家賃は一ヵ月十二円、上等酒一円八十九銭。週刊朝日編、値段の風俗史による。）

川柳

近間せつ
（通信十三回卒）

祝くされずとも天寿をおえし
人遺る

留守番のような過疎地の老夫婦

人生を語らぬ母の皺で知る

盆暮だけ賑いあり過疎の里

色あせた鏡掛けめくり見える顔

石段の高き仏に多く願を

囁く言葉もなけれど耳遠くなる夫

私にもチャンネル権あり冬の夜

カーテンをあければ今日の
ページあり

神棚に座ったままの宝くじ

同窓の集い

◇一中三三会法師大会
（一中三十三回卒）

晴天に恵まれた五月十八日、粟津温泉「法師」で、三三会の第十七回大会を催した。当日朝、出席を危ぶまれていた旭川の米林君から「唯今法師到着」との電話を受け、驚き且喜ぶ。出席予定の山中の関口君から「亡兄の十三回忌法要と重なり出席不能となった」との便りがあり、法師旅館気付で、無念の思いを託した和歌の短冊に添えて、酒・ビール・ジュースのご寄贈があり、一同感激した。

六時からの総会では、会長藤田君欠席のため、川西君が準備委員代表で開会の挨拶と物故会員の報告をなし、田中君から前年度会計の報告がなされた。アトラクションでは、小寺君の手品の種明かしの数々の妙手が披露されて注目を集めた。また、米林君の横笛には、年齢を感じさせぬ迫力があり、名笛「青葉の笛」もかくやらんと、ひしひしと感動させられた。そして三三会の歌、恩師讃歌を唱い、一中校歌を斉唱する頃にはやや息切れの感があった。全員八十歳を越えている者の集まりではこれも止むを得まい。最後は川西君の謡曲「千秋楽」で打ち止めとなった。

翌十九日朝、法師旅館の前で記念撮影、バスで観光の途に就く。那谷寺では仏のご利益もさることながら、全山を覆う樹木の深い緑と樹下一面の苔の浅緑の対照が印象深く、「石山の石より白し秋の風」の句碑にカメラを向ける文学老年の姿も好ましいものであった。加賀温泉駅裏の大観音像を車窓に拝して「加賀お菓子城」で小憩、橋立の「北前船の里資料館」見学、恵比寿亭で昼食。俗（はざま）美術館見学。俗伊之助氏は吸坂で焼物を作ったらしい。時間に余裕があり、大聖寺に全昌寺を訪れる。見事に揃った新旧の五百羅漢を拝する。境内には「庭掃て出ばや寺に散柳」の芭蕉の句碑と、「終宵（よもすがら）秋風聞やうらの山」の曽良の句碑とが隣り合わせに建っていた。この観光で全昌寺は思わぬ拾い物であった。加賀温泉駅で東京組と再会を約して別れ、一路金沢へと向かった。帰宅直後、東京の山田義孝君の訃報を受けた。

今回の出席者

近藤師家司、武藤文雄、村上外雄、小寺俊一、高田小市、和田　光、米林　栄、村上　進、井口政雄、宇都宮亮一、川西弘晃、田中嘉太郎、辻義雄（以上十三名）

外に、高田夫人、和田夫人、井口夫人

（井口記）

短歌

近間せつ（通信十三回卒）

新入学校門を母子連れは
　ハンドル軽く待わして通りぬ
静かなる草の芽見ゆる日の続く
　今年の冬に年号変わりぬ
山の田畑駆けて育ちし手足持ち
　老いて悔いなき高きふしぶし
緑増す若葉の森に目を向けて
　暫憩はむ眼鏡を外す
巣づくろう燕の記録書き留むる
　年こえて子燕来ると聞きたれば
姉妹の集いし部屋より笑みし声
　こぼるるままに秋日傾く
掌を合わす墓前の我に添いて立つ
　老い増す母は低くなりけり
曼陀羅の顔映してや病みし児の
　澄みし瞳に夕焼け蜻
手作りの晴れ着と自慢の娘を見れば
　嫁しゆく日おも近くなりたり
「只今」の声聞き無事の一日を
　我御仏に感謝しており

◇一中七桜会 地元例会

風薫る五月十八日、七桜会の地元例会を開催す。東京より中村敏雄君が友情参加し十八名集る。十四時迎えのバスで香林坊大和裏から加賀路を一路山代温泉加賀屋宝生亭へ進む。旅館到着後、今回久々に参加した村田小太郎君や吉倉遠次君を囲み、昔日の桜章健児時代の回顧談に花が咲く。又学友の消息、近況を伝える。張江　啓君が去る四月叙勲の栄に浴せられ、我々同期で十名の叙勲者を出したことになる。心から祝意を表する。

一方八十四名の学友が既に昇天しあり、又病魔と闘っている友を思うと断腸の念にかられる。今はこのように集える幸せをしみじみ感ずる。齢将に男子平均寿命に到達した我々であるが、最後のゴール目指して余生を三年でも五年でも、又十年でも生き永らえんと切望する。

十八時記念撮影し懇親会にうつる。アルコールも相当進む。仲々元気なものだ。

謡曲、小唄、民謡、演歌と……大いに賑わう。

最後に全員立って一中校歌、応援歌を合唱し懇親会を終る。

各室に戻るも寝るものなく、青春時代の話題に花が咲き、夜のふけるのも忘れて時を過ごす。

翌朝食後、亦逢う日を楽しみにバスに乗り込み金沢に帰り流れ解散す。

今回の出席者

岩脇他計雄、国見弘臣、塩田和一郎、高村伊作、中村敬一、中村敏雄、長沼久善、張江　啓、福田外喜二、三須外男、南　為二、宮野宗一、村田小太郎、村田尚一、室賀　喬、吉倉遠次、吉岡秀雄、山瀬芳男

◇八桜会全国集会 （一中四十回卒）

今年の全国集会は、去る九月二十七日、全国から二十六名の参加を得て、鶴来の料亭（兼旅館）和田屋で催された。

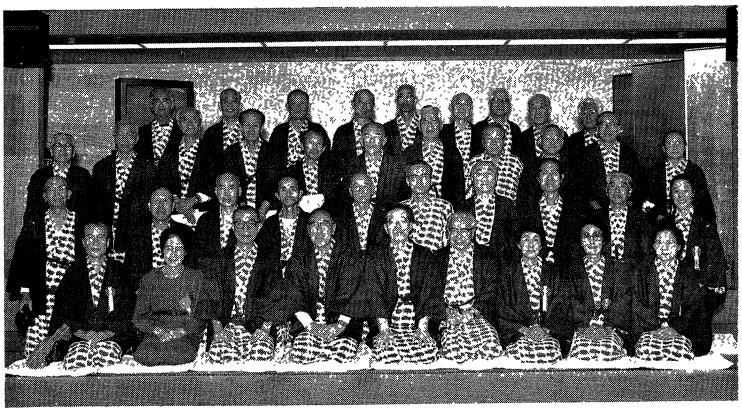
午後五時一行旅館に着くや、緑濃く水豊かな庭園の美しさと、しっとりとした和風建築の落着いたたたずまいに、全員早くも御満悦の態。

一浴の後、定刻午後六時宴にうつる。幸なるかな当料亭の御主人（和田英夫君）が泉丘七期生で我々の後輩であるとの御縁もあってか、次々と出される多彩な献立は何れも川魚料理、山菜料理のこりにこった逸品ばかり。中でも熊、狸料理の珍味を堪能できたのはさすがに和田屋ならではの感を深くした次第。その上酒は名代の銘酒萬歳楽、飲む程に酔う程に彼も我も思いは等しく二八の少年時代にかえり、談論風発数時間。最後の一滴を飲み干し校歌等を高らかに斉唱してそれぞれの部屋にもどる。此処ではもっぱら在学時代の失敗談、珍談に笑い興じ、懐しい渾名の先生方の思い出話に花が咲くことしきり。それにつけても当時の先生方は皆立派な学者揃いで、金沢一中の教官としての誇りを持っておられたのであるが、一方我々一中生は（中には大変なやんちゃ坊主も多数いたのであるが）金沢の一般市民から四高生に次いで高く評価されていたと思うのはいささか自惚れと言うべきだろうか？

さて在学中の思い出放談一段落の後はそれぞれの戦争体験談に移り、語る人のほとんどが各兵科、全戦域に出征し九死に一生を得て帰国復員されたことを知り、生の喜びを一層深めると共に、今後の健康を願い合って、再会を期したのである。

（野村　潔記）

◇金沢一中十桜会
第十八回全国大会



金沢一中十桜会（昭和十年卒業、第四十二回生）は毎年秋に関東・北陸の両地区交互に総会を開催し、懇親を深めておりますが、平成元年度は神奈川県箱根町湯本にある〝箱根路開雲〟（東京都保養所）に於いて、十一月十六日㈭～十七日㈮の両日開催致しました。

恩師藤田先生ご夫妻を始め、全国各地から集ったもの三十九名。

十六日の総会でこの一年間に亡くなられた西洋史の竹内直良先生及び会員三名（中側、岡本、宮川の諸兄）に黙禱を捧げご冥福をお祈りして後、議事に入り梶川会長の挨拶、各地区の会員消息等を夫々代表から報告した。

その後懇親会に移り、藤田先生のご挨拶、乾杯に始まり、一年振りに会う人、久し振りに顔を合わせた人、又新に入会して出席した人等々話に花が咲き、終了後も各自の部屋に移って夜の更けるまで時間の経つのを忘れる次第でした。

来年度は北陸山代温泉で十一月中旬開催することを決めて解散した。

翌日の箱根観光はバスとタクシーに分かれて強羅、早雲山、芦の湖と周遊して紅葉を楽しんだが、雨にたたられたのは残念でした。

大会の出席者は次のとおりです。

藤田先生ご夫妻、梶川欽一郎会長、今井国男、上島外二、小黒智蔵夫妻、柿木義夫、葛西　満、久間賢三、久保木信夫、鴻野五八夫妻、小泉甚三、駒居三郎、酒井　正、坂本六郎夫妻、新保彦四郎、高畠有幸、谷内亮三、玉村文雄夫妻、中谷外作、西村忠恭夫妻、東　勉、三浦彦則、諸江敏夫、八百久雄、山内　亮、山田謙造、山本欽一、八日市屋二三雄夫妻、米山兵吾、古沢英雄、久保田全俊

（久保田記）

◇卒業五十周年クラス会
（一中四十六回卒）

一泉同窓会総会に出てつくづく思うこと。今や世間様はまったく泉丘高校時代になったと。金沢一中卒業生は総会には一応大先輩と奉られて、前部席に坐らせられるが、その数寥々。時は流れ時代はかわりたりの感深し。

ただし、その古き桜章健児のよき時代を知るわれわれ四十六期は五十年前昭和十四年の卒業。在学中に本多町旧校舎から泉丘原頭に建つ新校舎への大移転を体験した。この新校舎も既に取壊され、さらに超近代的校舎に改築され、人呼んでこれを、「泉が丘ホテル」と言う。

さて、卒業五十周年は人生の大きな節目……やるからには一流の温泉で一泊ということで開催場所は次のごとく

於　和倉温泉「加賀屋　渚亭」

平成元年十月十五日

一中卒業後半世紀、行雲流水の人生を共に語らんと全国各地より出席した期友は

〔東北関東〕巻山裕夫、長沢剛正、西田勝二、西田敏男、菅野孝夫、村井又兵衛、村上淳男

〔関西〕細川　熙、加藤　敬

〔北陸〕金谷与平、内田　一、石立実、稲松敏夫、梅林　清、片岡茂太郎、加藤智可良、金丸直治、

辻　良徳、瀬川雅善、寺内良雄、登谷栄作、中村政男、浜里三郎、日野実慧、藤井欣一、福沢秀一、深田元夫、二口　敬、松本忠男、松本洋三、松本豊次、松谷　功、宮本敏之、宮村利雄、三崎秀夫、山田正勝、青梅洪治、太田定夫これ皆戦前、戦中、戦後と生き抜いてきた面々。

全員で記念撮影のあと、今は亡き六十名の期友のご冥福を祈って心から黙禱。老後の健康保持はいかにあるべきかを宮村、片岡、登谷三医師から承ったのも一趣向であった。

友あり遠方より来たる。また愉しからずや。五十周年ともなれば、卒業以来はじめて会ったという者もいて、その後の懇親会は時の過ぎるのも忘れての談笑組があちこち。

もちろん校歌、応援歌連続十二題。いくつ何十歳になってもこれはジャマナイ。

最後の万歳三唱は東京の村井又兵衛君で、しめくくったが、散会後も各室を訪ね歩き歓談は深更までも続いた。

なおクラス会に先がけて昭和十二年本多の森旧校舎より泉丘新校舎移転時の記録ビデオを映写したがきわめて好評。その声紹介。

○「アリャ第二高等女学校の塀やガイヤ。ホンマに懐しや」

（…ムカシの軟派はイマも…）

○「デモ（吉野先生）、ガン太（中村先生）、ゲルマン（竹内先生）皆若いなあ」

（…名前忘れてもアダ名忘れじ）

○「これを写しておいてくれた英のオッサンには最敬礼や」

出席者全員一刻千金の思いを共有し、今回の集いに出席できた幸せを痛感したのであった。（太田記）

◇琵琶湖畔で
鎮魂同窓会
（一中四十七期）

金沢一中を昭和十五年に卒業した第四十七期生の中で、四年生から四高へ入学した西村潔、西村寿の両君は、昭和十六年四月六日琵琶湖高島沖の荒波でボートが転覆、遭難して以来四十九年ぶりに一中同期生三十名が琵琶湖畔へ集り、戦争も敗戦も現在の経済大国日本の姿も知らずに亡くなった両君を偲び鎮魂の同窓会を開催した。

平成元年四月二十一日午後六時、全国から琵琶湖畔へ集り、同期の大森宮司の司会で一泉同窓会の大蔵常任委員が花束を湖へ投げ、ありし日を偲び一同黙禱を捧げた。「琵琶湖周航の歌」を浜屋君のリードで合唱した。学生時代の二人をおもい、鎮魂の歌に涙して息もつまり声の出ないものもいた。

ホテル湖琴荘で歓談の時も湖底の二人の話ばかりで、寿はエッグ、潔はシャンといったなどと亡き二人と一緒に喋っている様な雰囲気が醸し出され、一中時代に帰った様な錯覚さえ覚えた。

中川智雄君が当時のことを詳しく調べて発表したが、四月六日は綻びはじめた桜に冷たい氷雨が降り潔君の遺体は十一日に収容されたが、寿君の遺体はなかなか揚がらなかった為に親の執念で、金石漁業組合の底引き網により、湖底をさらい、漸く四十五日後の五月二十日午前十時半頃、大溝沖合い二キロ、水深百五十

尺の湖底から引きあげられた。父親伊三郎氏によれば、オールを持ったままの姿であったそうである。

その後、全員の近況を報告しあったが、島田猛君は四十九年ぶりに半身不随の身を奥様に支えられて出席したが、立派なカイゼル髭を蓄え、全く昔の面影が無かった。然し時間のたつにつれ一中時代の姿を思い起す事ができた。

軍人時代は中野学校を卒業して辻政信らと行動を共にし、スパイとして勇名をはせた為か、同級生を貴君と呼び、自分を小官と呼んでいたが、生死の間をさまよい国の為に働いた姿に感動さえ覚えさせた。不自由な身をおして出席した島田君の今後の健康を祈りたい。

翌日は比叡山参詣後京都観光をして、夫々関東、関西、北陸へ帰ったが、同期生の慰霊をして本当に感動的な同窓会であった。

来年は卒業五十周年にあたり記念同窓会を北陸の温泉で開催することを約し、お互いに元気で再会しようと誓いあった。

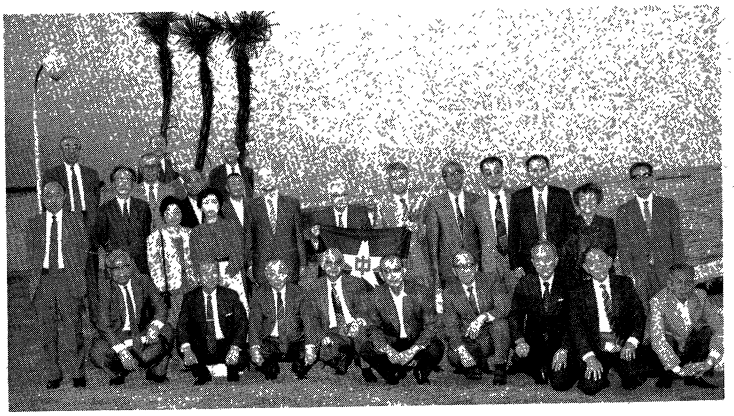
関東、関西、北陸各地からの出席者はつぎのとおり。

〔関東地区〕池　保、小鍛治敏雄、辻沢七郎、中川智雄、中野喜代二、中島章、中村達、深見信一、宮保彦継

〔関西地区〕木村和義夫妻、木村博、島田猛夫妻、前川伸、水島博、元田隆、森沢正夫

〔北陸地区〕上田栄一、大蔵吉夫、大谷渉、大森俊夫、坂井一栄、篠田修夫妻、中川政義、中村吉次、浜屋芳次、宗広進吾

（大蔵吉夫記）

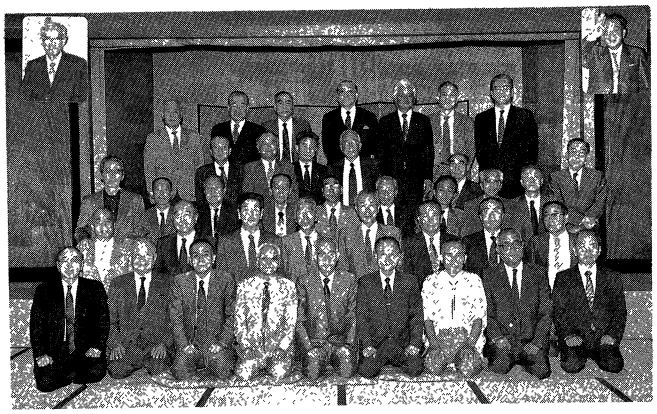


◇一中四十九回同期生会

拝啓、千草にすだく虫の音が、移りゆく季節の囁きに聞こえ、云々にはじまる、小川忠男氏の名調子の呼びかけに、平成に入って初の同期会は、金沢市尾張町の料亭「大八」において、九月二十二日盛大に開催されました。越馬平治同期会々長の下に四十二名の参加を得て仕掛人一同大いに喜んでおります。尚今回のイベントは、同期南平吉氏が六十三年秋、永年にわたり社会事業に貢献され藍綬褒章を授与され、これを祝福することでした。うち遠く県外より参加された方は九名でした。

参加者は次の通りです。

浅村一二、荒川正、石川治、石川元一、石田直行、五十嵐三郎、上野方弘、尾戸嘉博、大村孝、岡田虎二、岡本欣三、小川忠男、小原幸雄、加藤健一、北川孝、越馬平治、斎藤弥吉、坂尾重光、笹賀清一、竹林良雄、多田安夫、高畠賢二、釣谷利夫、豊島嘉已、中島正雄、西井義隆、野村成紀、橋本外清、橋場一之、深田幸雄、藤井明、前田精行、松木文蔵、宮崎正孝、南平吉、村田晃、八木秀夫、山田成一、山上俊夫、山川孝、山本二夫、吉村実　（斎藤弥吉記）



◇一桜会平成元年大会
（一中五十一回卒）

九月三十日、片山津温泉「白山荘」において金沢一中五十一回生の平成元年大会を開催した。全国的に悪天候が続いた九月であったが、この日は快晴に恵まれ、室谷君のお世話で午前中よりゴルフコンペ。午後六時より夕食懇親会。今回の世話係は川原・佐野両君。

参会者は三十六名（内、恩師二名）懇親会に先立って物故者三十四名の冥福を祈り黙禱。少年時代の一人一人の元気な顔、しぐさなどが彷彿としてくる。続いてわざわざご出席下さった桑原定平先生、東正夫先生のご挨拶をいただく。桑原先生は八十二歳、「世話をしてくれる女性にも恵まれ、幸せの毎日を送っております」というお言葉に大拍手を送る。東先生は七十二歳。目下現役でご活躍中。十歳、二十歳先輩の先生方の謦咳に接し、洟たれ小僧一同、まだまだ前途に光明を見出した次第である。

宮会長のユーモアに富んだ挨拶に続いて、関東勢を代表して越田君の乾杯の音頭で夕食懇親会に入る。停年退職となり、やや閑を得て初めて参加した小生にとって、誰が誰やらさっぱり分からず、浦島太郎のように戸惑っていたが、名簿に照らしつつ、恐る恐る声をかけると途端に少年時代の顔がよみがえってくるから不思議である。「昔は君、紅顔の美少年だったなあ」といえば、「今でもそうだよ」と平然という。その自覚症状のなさが愉快である。いたずら好きのK君は、授業中でも我等思春期時代を代表して楽しませてくれた。その話をすると、K君は顔を赤らめてはにかんだ。そのはにかみかたがなんともいえず清々しい。

顧みると、我等が歴史六十余年は激動、変動の節目節目に立たされてきたように思える。昭和とともに生まれ、尋常小学校一年の「サイタサイタサクラガサイタ」の色刷りの国定教科書は、我々から始まった。一中時代には、皇紀二千六百年式典、第二次世界大戦の勃発、たちまち戦時色一色に塗りつぶされた。応援歌にもあるように、九夏三伏暑き日も、厳冬霜雪寒き日も飢餓の中で耐えてきた。一中の創立五十周年を迎えたのもそのころであった。そして二十歳の成人とともに敗戦の洗礼を一身に浴びた。

卒業後四十五年間、国土復旧、高度経済成長と、昭和の戦士として苦労してきた顔、顔が今ここに集まった。そして、還暦を越えてもまだ話題は現在、未来についてである。平成年代もまた生産活動を続けていくであろう。

応援歌に声を張り上げ、翌朝、三々五々、それぞれの営みに向かって元気いっぱい散っていった。「死に花を咲かせるな。花は生きている間に咲かせよ」一中在学中、健民修練所で聞いた禅寺の僧の声が未だに耳から離れない。

（三田村記）

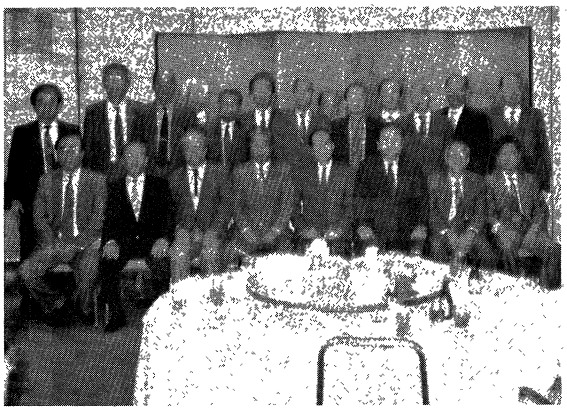
出席者

〔関東〕朴木春夫、伊藤栄一、西川忠、堀内俊彦、島和夫、越田保、平松工人、井上道雄

〔関西〕水落出、大森三郎、酒井忠之、宮野良雄、三田村正治

〔北陸〕室谷与三松、宮太郎、荒野昭、吉岡清、越村吉郎、太田一雄、松田良三、石黒義男、木田威俊、清水進、中野利男、竹田徳太郎、藤沢正清、中本次雄、小畑四郎、石田豊、岩本昭一、西本和夫、佐野豊、川原善一、中川忠雄

◇卒業四十周年
金沢一高同窓会



平成元年五月十三日午後五時より金沢ニューグランドホテルにて金沢一高卒業四十周年の同窓会を開いた。

遠く東京、横浜、大阪より来たる諸君を交え二十四名、宮崎泉丘高校校長、渋谷一泉同窓会々長も出席、初めに渋谷会長の講演を一時間あまり聞き、六時より懇親会を行った。

出席者

石動健三、乾芳次、伊藤朝隆、川合健、川北篤、北潟宣治、小村良智、小森鎌一、近藤外志雄、坂本基、経田政人、刀弥有三郎、中橋寿雄、服部弘、福岡正、前田進、村下貢、矢部輝夫、山田浩、山本正純、油谷博、宮岸昌朗、和田光彦、吉竹毎謳

尚今後毎年行うことを定め八時過ぎ解散、二次会場へ移った。

（吉竹　記）

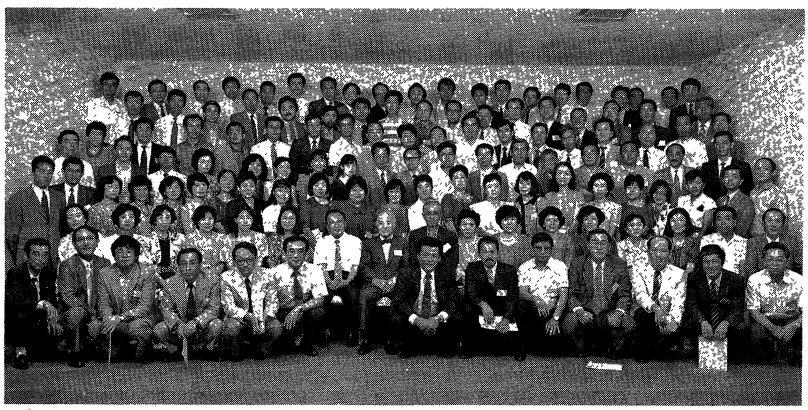
◇一七会
卒業二十五集年の集い

泉丘十七期の同期生が、卒業二十五周年を記念し、平成元年八月十二日㈯の夕、金沢ニューグランドホテルに集い、卒業以来三回目の同期会を開きました。

当日は、全国各地より百三十四名の仲間が参加し、高橋正行、美谷一夫、山村治の三恩師を囲んで、歓談の輪が広がりました。

そして、嶋谷潤一郎君の司会のもと、会もなごやかに進められ、途中にはビンゴゲームも行われ、参加者一同童心にかえって大いに楽しみました。二十五周年にちなんで、二十五位までに入った仲間には、用意されていた豪華な賞品が手渡されました。会の後半には、これまで空席となっていた会長ポストに、小堀幸穂君が参加者全員の賛同のもと選出されました。

さらに、次回同期会の開催時期についても、母校創立百周年の記念すべき年である平成五年八月と決まり、再会を約し、元合唱部の仲間のリードで、参加者全員校歌を斉唱いたしました。



最後に、夫婦が同期生同志である五得馨一・南理子夫妻の音頭で万才を三唱し、あっという間に過ぎてしまった一夕の宴の余韻を胸に散会となりました。

なお、この日のために準備してきた同期生名簿（七月末現在の氏名・住所等掲載）も、広告掲載に快く応じてくれた二十四人の仲間のおかげで立派に完成し、会場で配布することができました。

また、同時に計画を進めてきた二十五周年記念植樹についても、学校側の全面的な協力を得て、十月七日、母校前庭に「ハナミズキ」を植え込むことができました。

今後、我々十七期同期生一同と母校を結ぶ一本の樹木として、立派に育つよう見守っていきたいと思っております。

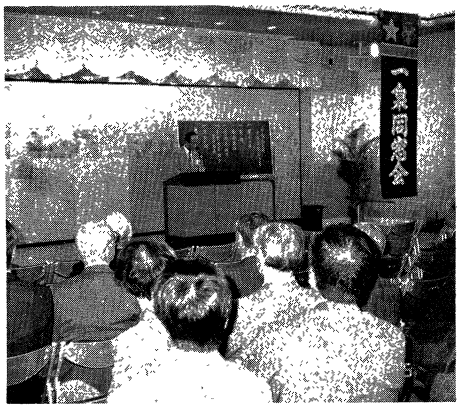
（事務局　福田記）

同窓会通信

平成元年度 一泉同総会総会、懇親会

平成元年度一泉同窓会総会並びに懇親会は、十月十五日会場を前年度のセンチュリープラザから、改装なった金沢ニューグランドホテルへ移して開催した。

総会に先立ち午後三時半から母校金沢泉丘高校前庭の厳霜碑前で、会員物故者の慰霊祭が石浦神社長谷宮司の司祭によりおごそかに行われた。渋谷同窓会長、宮崎泉丘高校々長始め、同窓会役員、会員、泉丘高校教職員等多数参列し玉串を奏呈して物故会員の冥福を祈った。



午後四時半から総会場で受付けを開始、今年は泉丘八期、九期、十期、十八期の卒業期が幹事期となり色々会の準備、運営を担当した。定刻には四百名近くの参加を得て総会を開いた。先ず物故会員の冥福を祈り黙禱を捧げた後、渋谷会長の挨拶、四年後の創立百周年に向けていよいよ本格的に取組む決意を披露、会員のますます協力、支援を願う、ついで宮崎泉丘高校校長の学校の現況報告を兼ねた挨拶、事務局から一年間の活動報告、会計決算報告があり、会員の承認を得て総会を終わる。

引続き会場を四階の懇親会場に移し懇親会に入ったが、会場が一ヶ所で入り切れず、受け付けロビーを狭んで別室をも会場として、主会場と従会場はテレビで連絡するということで開催。渋谷会長の挨拶の後、会長、学校長、一中、泉丘卒業生代表が出て万歳楽で鏡開き、一中、泉丘健児の意気をあげ、一中三十二回卒の浅野直久先輩の音頭で乾盃、泉丘高校楽団の校歌、応援歌を吹奏する中で懇親会は進められた。福田（泉六回）増山（泉20回）のたくみな司会で進行、四百名近い会員は各テーブルを渡り歩き、旧友と語り合い、先輩後輩と挨拶を交し、又スピーチ、応援歌の合唱など、次々とマイクが廻り、いつまでも名残りがつきず、時が過ぎ、九時近くに一泉同窓会の発展を祝い万歳三唱して散会した。

事務局だより

○一泉同窓会役員の変更

副会長　一中三十三回藤田誠一氏
一中四十四回山長与作氏　泉丘六回柴野常太郎氏が退任され、新に一中三十九回山瀬芳男氏　一中四十五回荒川宏氏　泉丘十一回井波豊英氏が就任。

○記念誌委員会発足

学校創立百周年記念事業の記念誌発行が決定。平成元年七月に記念誌委員会が発足。委員長に一中四十五回荒川宏氏、委員に一中五十四回山本道生氏、泉丘三回松村晴夫氏、同井波外志雄氏、泉丘十回浅香以都子氏、泉丘十一回井波豊英氏、泉丘十六回広瀬靖久氏、通信九回釜谷鉄山氏、同二十八回村本喜和子氏の各氏を委嘱した。

◎図書の寄贈

故中川三津夫氏（一中四十八回卒）のご家族より

「金沢・虚像と実像」

右図書のご寄贈を頂き、有難うございます。

◇あとがき◇

会誌「一泉」は会員の作をそのまま載せております。会員相互の語り合いです。同窓の皆様からの所見、随想、会合報告、歌、俳句などどしどしご送稿下さい。　（事務局）